報告

神恵内村に足を運んだ Z 世代の対話より

フリージャーナリスト　井内 千穂

すでに 60 年近く溜まり続けている放射性廃棄物（核のごみ）の問題について，各地の中学生たちが集まって話し合う企画「中学生サミット」が 2011 年以来ほぼ毎年開催されてきた。すでに成人した初期の参加生徒たちを筆頭に，昨今 Z 世代と呼ばれる若者たちが，10 年余のサミットのバトンをつないできたことになる。2022 年 8 月，文献調査が進む北海道・神恵内村を訪ねた Z 世代の若者たちは何を語り合い，何を発信するのか。その思いを報告する。

KEYWORDS: high-level radioactive waste, deep geological repository, dialogue, facilitation

Ⅰ．核のごみをめぐる状況

日本では，国の核燃料サイクルの方針により，使用済み核燃料は再処理され，ウランやプルトニウムを回収した残りの高レベル放射性廃液を高温で溶かしたガラスと混ぜてステンレス製のキャニスタと呼ばれる容器に入れて固形化（ガラス固化体）して，300 メートル以深の地下に地層処分することになっている。

2000 年に成立した「特定放射性廃棄物の最終処分に関する法律」（最終処分法）により，原子力発電環境整備機構（NUMO）が設立され，また，高レベル放射性廃棄物の最終処分場の建設場所を選ぶために，「文献調査」「概要調査」「精密調査」の 3 段階の調査を行うことなどが定められたが，最終的な処分地はいまだに決まっていない。

2020 年 10 月，北海道の寿都町が文献調査に応募し，同じく，北海道の神恵内村が国からの文献調査申し入れを受諾した。2020 年 11 月より，NUMO は寿都町および神恵内村において文献調査を実施中である。

Ⅱ．中学生サミットの実践

高レベル放射性廃棄物（核のごみ）の最終処分に万年単位の年月を考える必要があるのは気の遠くなるような話だが，そのために最も現実的で適切な方法とされている地層処分自体も，処分地選定から処分場建設，放射性廃棄物の搬入などの操業，そして，最終的には施設の閉鎖に至るまで 100 年以上かかる大変な事業である。今生きている世代で地層処分事業の完了を見届けるまで生き長らえる人は誰もいない。若い世代に，そして，今はまだ生まれてもいない次の世代に，バトンタッチしていかざるを得ない。

だから原子力など使うべきではなかったなどと今さら言ってみても，すでに発生した放射性廃棄物はなくならない。現代の人類が抱えてしまった核のごみをこのまま放置するのはあまりにも無責任である。世代を超えて引き継いでいかざるを得ないのであれば，次の世代がその時代の状況に合わせて主体的に取り組んでいけるように，最大限サポートの上，共に考えていくのが現在の大人世代の責任ではなかろうか。

その意味で，先見の明があったと言えるのが，学術フォーラム『多価値化の世紀と原子力』（代表：元東京工業大学助教 澤田哲生）の主催で，『どうする！？核のごみ（高レベル放射性廃棄物）』をテーマに毎年 1 回開催されている「中学生サミット」という企画だ。初回は 2011 年 1 月，東日本大震災の直前だった。そして，震災翌年を除き，また，コロナ禍の影響でオンライン開催となった 2020 年度を含めると，2022 年 8 月で 11 回目となり，毎年開催されてきた継続的な取り組みである。

当初の数回は，岐阜県瑞浪市に集まって，瑞浪超深地層研究所の地下 500 メートルの研究坑道を見学した上で中学生の目線でダイアローグ（対話）を行うという内容だったが，参加生徒たちからの「放射性廃棄物の再処理はどこで行われているの？」「原子力発電所ってどんなところ？」といった疑問や関心の広がりとともに，六ヶ所村や福井県での開催へと発展していった。

主催の澤田氏によると，中学生サミットの目標は，中学生の目線で，ダイアローグ（対話）を行うことであり，ポイントは，①議論を自分たちで内省的かつ発見的に構築し，他者の見解を批判的に取り入れて自らの見解をアップデートできるか，②立場（原子力立地地域か都市消費地かという出身地域，学年，ジェンダーなど）を超えて，相手に配慮した意見の表明や対話ができるか，の

Ganeration-Z students visit Kamoenai Village in Hokkaido and have a dialogue about high-level radioactive waste：Chiho Iuchi.

（2022 年 10 月 13 日 受理）

写真１　神恵内村にてグループに分かれて対話（写真：井内千穂，以降の写真も同じ）

2点である。核のごみの問題に特化してはいるが，国家や社会の問題を自分の問題としてとらえ，自ら考え，自ら判断し，その輪を広げて行動していく主権者が自己発見的に育っていくことも目指しているという。

私は2016年度（2017年1月）に初めて，この「中学生サミット」を同行取材した。「生徒の，生徒による，生徒のための対話」であるため，なかなか対話が進まないまま時間切れになったことを思い出すが，生徒たちは，地層処分のメリットやデメリットについて真剣に考え，処分地としてどこが適すると思うか，かろうじて隣の生徒に聞こえる小声で，「六ヶ所村でいい」「首都圏で引き受けるべきだ」「福島はどうか」といった大胆な意見を交わしていた。大人の目からは未熟な議論に見えるかもしれないが，それは生徒のありのままの姿だったし，本人たちは結構楽しんでいるように思えた。

また，2018年の中学生サミットでは，「もしも自分が自治体の首長だったら最終処分場を受け入れるか？」という想定で意見を出し合い，京都の生徒たちが，「京都だけは絶対に最終処分場にすべきではない」と主張していたのが強烈に印象に残った。いわゆるNIMBY（Not in my back yard）の主張の典型例と言える。単に自宅の近くはイヤだというよりは京都という価値への誇りが感じられたが，どこの地域も，住む人々にとってかけがえのない価値を持った大切な故郷であることに変わりはない。

翌2019年はその京都で，まさにNIMBY問題をテーマに，活発な話し合いが行われた。対話をリードして盛り上げたのはNIMBYそのものだった京都の生徒たちだった。なかなか結論が出るテーマではない。その頃まで私は，処分地選定は永遠に始まりすらしないのではないかという気がしていた。ところが翌2020年，コロナ禍中の秋，北海道の2つの自治体が文献調査を受け入れるというニュースが流れ，2年経った今，両自治体で文献調査が佳境を迎えている。

この5年余りにも世界は激変に次ぐ激変に見舞われ，私たちの暮らしは翻弄され続けている。2020年以来のコロナ禍の一方で，異常気象の頻発など激化する気候変動への対策として脱炭素政策が加速し，2022年に入るとロシアのウクライナ侵攻に震撼しつつ，エネルギー価格の高騰と電力不足に直面する日々だ。エネルギー確保が死活問題となる中，日本でも8月には「原発再稼働『賛成』58％・『反対』39％，初めて賛否が逆転…読売・早大世論調査」（読売2022.8.24）という記事が目を引いた。

混沌とした時代を生きているZ世代の生徒たちは，どう考えるのか。

Ⅲ．中学生サミット2022に同行して

1．神恵内村で聞いたZ世代の気持ち

2022年8月，東京，京都，福井，沖縄から参加した中学生と高校生が新千歳空港に集合し，主催者側，引率の先生方，その他講師役などの大人たちと合わせて総勢約30名が，バスでさらに2時間半，積丹半島の西側に位置する神恵内村に向かった。私は2016年度以来，コロナ禍以降のオンライン参加を含め，毎年参加してきた縁で，今年は北海道まで同行する機会に恵まれた。

今年のサミットでは，ひと言で言って，地層処分の中身についての話し合いはほぼなかった。恒例だった原子力発電環境整備機構（NUMO）によるレクチャーもなかった。どうやら各校で事前学習の機会があったようだ。

現地で生徒たちが話し合ったのは，もっぱら，この地層処分の話を「みんなに知ってもらうにはどうしたらいいか」についてであった。地層処分について自分がどう考えるのかについて意見交換することは主眼ではなく，これまでのサミットを見てきた身としては，ちょっと拍子抜けだった。

しかし，よく考えると，地層処分への人々の関心が低く，現状どうなっているのかをろくに知らない人が多いことこそが，目下の大問題とも言える。いわゆる意識の高い生徒たちが，たまたま地層処分の問題を知り，中学生サミットに参加する機会に恵まれても，周りの友だちも家族もほとんどこの問題を知らない。生徒たちは，もっと多くの人に関心を持ってもらわないと話が前に進まないというところにフォーカスしたのだった。

4つのグループに分かれて話し合った中で，私がサポートしていたグループではこんな発言があった。

Mさん（高2；福井）：地層処分の問題に関心を持ってから，学校での研究活動として，福井県の高校生の原子力に関する意識調査に取り組んでいる。何か原子力関連のニュースがあると，周りの友だちに「こんなニュースがあったよ」と話すこともあるが，「また原発の話？」と言われ，煙たがられてしまう。質問してくれたりすると嬉しいが，なかなかそういう感じにならない。

Oさん（中2；京都）：何か質問してみたい気持ちはあるが，知識があまりないので，こんなこと聞いてどうなのかと不安になる。知識がある人も，もう少しホワホワっ

とした感じで聞いてくれたら，質問しやすくなるんじゃないかと思う。

2人の女子生徒の話をクールに聞いていた男子生徒に，「友だちと話す時どう？」と水を向けてみた。

M君(中2；東京)：仲の良い友だちとは，原発の問題に限らず，ほかの社会問題のことも話す。自分の言ったことが無視されたり否定されたりしないで，ちゃんと聞いてもらえて，自分では思いつかないような違った意見を聞けるから楽しい。

3人の言葉から，誰しも自分の思いや考えを受けとめてもらいたいと願っていることが感じられた。自信が持てない意見でも，とりあえず，聞いてもらえれば，相手の話も聞いて，さらに自分の考えをアップデートしていけるだろう。ところが世の中には，頭ごなしに否定してかかったり，無視したり，しっかりした意見が言えないことを責めたり，「そんなことも知らないのか。じゃあ黙ってろ」と言わんばかりに無知を見下したり，そんな不毛な場面が多いのではないか。

「ホワホワっと柔らかく受けとめてもらえたら，Oさんは質問しやすくなるんだね。そして，興味を持って質問してもらえたら，Mさんは嬉しいんだよね」とまとめてみると，二人は笑顔で顔を見合わせてうなずいた。

これまでのサミットでも，「もっと周りの人たちに伝えるには？」という論点はたびたび出てきたが，「パンフレットをつくる」「テレビでCMを流す」「SNSを使って発信する」といった媒体の話に安易に流れがちだった。

その意味で，このグループの話し合いでは，媒体の話ではなく，「どういう場合に人は話すことが楽しいと感じ，話の内容に関心を深めていくことができるのか」というコミュニケーションの質について意見が交わされたのが画期的だった。生まれた頃からインターネットやSNSが当たり前に存在しており，「デジタルネイティブ」と呼ばれるZ世代だからこそ，生身の人間の心理に迫ろうとしていたということか。

2. 現地を訪ねた意義

はるばる北海道・神恵内村まで足を運んだのは，中学生サミットとしては初めてのことだ。神恵内村役場のご協力のおかげで，生徒たちは神恵内村青少年旅行村に宿泊して活動することができた。ただ，残念ながら，地元の方々との交流はごく限られたものであり，最終処分場の建設をより現実的な課題として受けとめざるをえなくなった神恵内村の同世代の生徒たちと，NIMBYの議論を超えて対話できるような場面はなかった。

村外の生徒たちだけなら，わざわざ神恵内村まで来て話し合う必要はなかったのかと言えば，そんなことはない。生徒たちは，神恵内村で見たこと，感じたことを共有しているからこそできる対話を味わっている。傍で見守る大人にもそれが伝わってきた。

沖縄から参加したMさん(中3)は，「初めての北海道で，新千歳空港に着いた時は都会だなあと思って緊張したが，神恵内村に入ると，沖縄の地元と同じように畑もいっぱいあって，親しみが湧いた」と言った。

人口790人弱の神恵内村にはコンビニもなく，移動の度にバスの窓から見えた酒屋が村一番の店だと聞いた。表通りに面した建物にも空き物件が目につき，歩く人影はほとんどなかった。地元の人に会ったのは，宿泊先のスタッフの人たち，2日目の昼食をとった平安荘の人たち，道の駅「オスコイ！かもえない」の店員さんたち，村役場の職員の方々ぐらいだったか。そのこと自体から村の状況がそこはかとなく感じ取れる。

また，2日目に見学した泊発電所が，神恵内村からバスで20分程度の近さにあることを体感できた。発電所構内では，1号機から3号機までの3つの巨大な原子炉建屋の威容に圧倒される。震災前は北海道の電力の4割を賄っていたという日本で最も新しい原子炉が3基，それ自体は事故を起こしたことがなくても，震災以来11年間動いていない現実を目の当たりにした。発電所では新たな防潮堤設置に伴う既設防潮堤撤去工事が進められている。

村役場では，村の産業について話を聞いた。ナマコやウニなどの特産品のブランド力を磨くことを目指す地域商社キットブルーの大塚英治さんは，「持続可能な漁村まちづくり」を目指して，漁業者の所得向上や後継者問題の解決，養殖技術の確立などに取り組んでいることを熱く語った。バスの窓から見える景色とのギャップに戸惑うが，洋上・地上の風力発電や太陽光パネルに加え，温泉熱や地中熱や蓄電池などを活用した再生可能エネルギーの設備，デジタル技術を駆使してエゾバフンウニを陸上で養殖する水槽群が描かれた未来図が配られた。村の生き残りを賭けたようなこの未来図に，「核のごみ」の最終処分場を組み込む可能性はあるのだろうか。

写真2　神恵内村あんない展望公園から望むジュウボウ岬

3. Kamoenai Call

2日目の午後，諸々の見学や講義を共有の上，生徒たちはグループごとに「地層処分をみんなに知ってもらうためにはどうしたらいいか」について熱心に話し合い，出てきたアイデアを模造紙にまとめた。3日目の朝にはメンバーを入れ替えてダイアローグの続きを行い，各グループの模造紙の中身を発展させて発表した。

中学生サミットは，「大人に見せる」ための発表ではなく，生徒たちが自力で対話を試みることに主眼が置かれるため，あれこれ意見が出るだけで，結論めいたものがあるわけではない。私はそれをありのままの姿として受けとめてきたが，2019年の京都で，今思えば一つの転機と言える場面があった。サミット終盤，ファシリテーター役を務めていた京都の女子中学生が，「せっかくここまで話し合ったことが，次回のサミットまでの一年間，何もしなければ，また振出しに戻ってイチから話し合うことになる。それでいいんですか？これからの一年間，各自で何ができますか？」と投げかけた。すると，生徒たちの中から，各校で地層処分の問題についてほかの生徒たちにも伝えるべく，自分たちで授業をやるのはどうかという提案がなされた。言い出しっぺの彼女は，「やるんですよ。約束ですよ！」と強調し，「みんなでやりましょう！私たちの手で私たちの授業を」というキャッチフレーズを即座にまとめた。これをKyoto Callとして採択するという形で，その年の中学生サミットはこれまでにない華々しさで閉幕したのだった。

結論は出なくても，ここまでやったという成果を言葉で残しておくことは，参加した生徒たちに達成感をもたらし，共有した言葉は，今後につないでいく「よりどころ」になる。それが生徒の中から自発的に出てきたことに感銘を受けた。以来，“Call”をまとめることが定着したようで，今回はプログラムにもその記載があった。

かくして，「つなげよう。ホワホワな話し合いで物語のバトンを」というKamoenai Callが採択された。神恵内村での3日間に出てきたアイデアが凝縮されたフレーズだ。長い時間を要する課題に取り組むために毎年開催されてきた「中学生サミット」で，その時々の参加生徒によって受け継がれてきた精神のバトンを自分たちもつないでいきたいという気持ちが込められている。また，京都の高校生I君のプレゼンを聞いて，地層処分の問題を“自分ごと”として考える人の輪をもっと広げて“Ours化”していくためには「物語」を一緒につくっていくのが有効だというアイデアに共感したのだろう。I君は2019年に京都でのサミットに参加して以来，地層処分の問題を考え続け，今回のサミットでは先輩として中学生たちをリードしていた。そして，「ホワホワっと聞いてほしい」と言ったOさんの気持ちもしっかり受けとめた文言だった。

写真3　各グループで話し合った内容を発表

4. ファシリテーターの重要性

Kamoenai Callは，サミットの最終盤，30分足らずの全体セッションでつくられた。感心したのは，そのスピード感もさることながら，文言を練り上げる民主的な話し合いだった。近い将来の主権者たるZ世代が自ら考え，自ら判断し，自分の意見を述べる姿は頼もしく，思わず，私たち大人世代の忖度文化を省みてしまう。

弧を描いて椅子を並べて座った生徒たちが，前方のホワイトボードを見ながら，ああでもないこうでもないと意見を出し合う中，メイン・ファシリテーターのKさん（大学2年；福井）は，彼らの発言を①目的②プロセス③雰囲気に分けて整理し，言葉遣いを提案者に微調整させたり，一同に挙手を求めたりしながら，選択肢を見事にさばき，「これでいいね！」と皆が納得する形にテキパキとまとめた。

なかなか盛り上がらず結論がない対話も，ありのままで良いと思っていたが，適切な声のかけ方によって参加者が生き生きと発言する様子に，ファシリテーターという役割の重要性を改めて感じる場面だった。

神恵内村では，文献調査の受け入れが始まって半年ほど経った2021年4月から，NUMOと共同で運営される「対話の場」がこれまでに8回開催された。神恵内村から18名（内，4名は公募）が参加して行われている。そのファシリテーターを務める大浦宏照さん（NPO法人市民と科学技術の仲介者たち代表理事）のお話を聞くという貴重なセッションが，今回の「中学生サミット」のプログラムにあった。

大浦さんによれば，「突然降って湧いたような地層処分の話に，みなさん不安を抱え，いろいろな意見を持っている。これから何が起きるのか？村に分断が起こるのではないかと，対話の場に来ることを最初は怖がっておられた」ということだ。回を重ねるにつれて，対話の場でのグループワークは「時間になっても止まらなくなった」という充実ぶりで，ファシリテーターとしても，「参加者のみなさんが楽しそうに話していて，自分が予想していなかった意見や見方が出てくることを結構楽しんで

写真 4　生徒たち全員の知恵と力でまとめられた Kamoenai Call

いる」とのことだった。

どういう場合に人は話すことが楽しいと感じ，話の内容に関心を深めていけるのか。ファシリテーターが大きな役割を果たしていることが感じられる。

5. 今後に向けて

一方，NUMO がまとめた「寿都町・神恵内村を中心とした今後の『対話活動』の課題と展望」によると，①地層処分について，多くの住民が，まだ勉強できていない状況であり，②周辺市町村等に対して十分な説明ができておらず，③地層処分について，全国的な議論が不十分な状況で，「全国民が関心を持たなければならない話なのに，手を挙げた地域だけが悪者になっている」という意見が神恵内村から出されているという。

確かに，地層処分自体に反対の人々は，手を挙げた地域を「けしからん」と思うかもしれない。一方，地層処分の必要性は認めても自分の地域の近くが処分場になるのはごめんだという NIMBY な感覚の人々は，北海道の 2 つの自治体が手を挙げてくれたから，もう自分には関係ないとばかりに無関心を決め込むかもしれない。

寿都町と神恵内村が文献調査の受け入れを表明した 2020 年の秋は報道も多く，大きな反響があったが，文献調査が始まって報道が減ると，「寿都町」「神恵内村」といった地名も，その 2 つの自治体で今，地層処分についての文献調査が進められている事実も忘却の彼方にある人が多いのではないか。新しいニュースが次々に入ってくると，それ以前に聞き知った事柄は簡単に忘れてしまうのは，情報源が TV でもスマホでも同じだ。

しかし，概要調査に進むかどうかという 2022 年秋の正念場には，また報道が増えることだろう。その時に，多くの人々がよくわからないまま反対論に流れるのではなく，また，神恵内村や寿都町だけに問題を押し付けるのでもなく，地層処分について，自分の問題として考えていかないことには話は前に進まない。しかし，「関心を持つべきだ」というスタンスで迫られても，関心を持てるものではない。とかく堅苦しくなりがちで難解な核のごみの最終処分の問題など，家族も友だちも，あまり考えたくも話したくもないのが本音だろう。

すでにある放射性廃棄物をどうすればいいのか。仮に地層処分が適切だとして，どこに埋めればいいのか。正解のない問題であるが，先送りしていても廃棄物はなくならないどころか，原子力発電所を再稼働すればさらに増えていく。

電気を使い続けていく私たち一人ひとりが，正解のないこの問題を“自分ごと”として，一緒に考え続けるには，知識がなくても，わかっていなくても，何でも質問できて，ああでもないこうでもないと思いつきのようなアイデアを出し合えるような，そんなホワホワっとした場が意外と大事なのではないか。Z 世代の感覚である。

帰路のバス内で何人かの生徒たちに感想を聞くと，「話し合い（対話）が楽しかった」「聞きたいと思って聞いてくれる」「先輩たちがすごい」「もっと話し合う時間がほしかった」と口々に言っていた。

神恵内での初日は，まるで中学生サミット一行が歓迎されざる客であるかのように感じる土砂降りだったが，日を追って天気が回復し，3 日目には空と海の“神恵内ブルー”に魅せられた。次の機会には，この美しい神恵内村の Z 世代とも，「Kamoenai Call」が謳う「ホワホワな話し合い」を共有できることを期待する。

― 参 考 資 料 ―

1)「オスコイ通信」創刊号，第 2 号，第 3 号，NPO 法人市民と科学技術の仲介者たち内編集委員会，2022 年.
2)「原子力発電環境整備機構（NUMO）の取組みについて」原子力発電環境整備機構，2022 年 4 月.

著 者 紹 介

井内千穂（いうち・ちほ）
元・英字新聞ジャパンタイムズ編集者。
法政大学大学院公共政策研究科修士課程在籍中。
（専門分野/関心分野）環境倫理学・核廃棄物と熟議民主主義・個の力と集団の関係。